様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ８ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４３０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６６１２

研究課題名（和文）『分析手帖』の研究―1960年代フランスにおける「概念の哲学」の発展

研究課題名（英文）Research on "Cahiers pour l'analyse": development of the Philosophy of concept in 1960s France

研究代表者
坂本　尚志（Sakamoto, Takashi）

京都薬科大学・薬学部・准教授

研究者番号：６０６３５１４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1960年代にフランスのエリート養成機関のひとつであるパリの高等師範学校の生徒たちが公刊した『分析手帖』の全体像を把握することを目的とした。『分析手帖』は精神分析、エピステモロジー、マルクス主義という3つの思想的潮流の合流点に、新たな「言説の理論」を打ち立てることを共通目標としていた。本研究は、1966年から69年にわたって10号が刊行されたこの雑誌の分析によって、68年5月以前のフランスの「概念の哲学」の展開を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research aims to understand the totality of "Cahiers pour l'analyse", published in the sixties by students at the Ecole Normale Superieure.
The "Cahiers pour l'analyse" attempted to establish a new "discourse theory" at the confluence of three currents of thought, that is, psychoanalysis, epistemology, and Marxism.
We have brought to light, through the analysis of ten issues of this journal, published from 1966 to 1969, the development of the "concept philosophy" in France before May 68.

研究分野：20世紀フランス思想史

キーワード：分析手帖　エピステモロジー　概念の哲学　精神分析　マルクス主義　スピノザ　フーコー

１．研究開始当初の背景

フーコーが指摘したように、19 世紀以降のフランス思想には「主体の哲学」と「概念の哲学」という二つの潮流が存在する(Foucault, 1985)。アルチュセールのもとで学び、ラカンが主宰するパリ・フロイト派に参加した高等師範学校生のグループ「認識論サークル」によって、60 年代後半に 10 号が刊行された雑誌『分析手帖 Cahiers pour l'analyse』は、アルチュセールの政治思想史、ラカンの精神分析、バシュラール、カヴァイエス、カンギレムたちのエピステモロジー（科学認識論）等の「概念の哲学」に属する思想の影響のもとに、学知（la science）の理解を可能にする「言説の理論」の構築を目指した。「認識論サークル」には、精神分析家ジャック=アラン・ミレールや哲学者アラン・バディウなど、後にフランス哲学・思想界において活躍する人物が多く含まれていた。つまり、『分析手帖』はその後のフランス哲学・思想の担い手を育んだ知的生産の場であった。

近年かつての「認識論サークル」メンバーへのインタビューやさまざまな論者による『分析手帖』の現代的意義の考察などによって、この思想運動の全体像を把握する試みが行われている（Hallward and Peden 2012）。こうした研究の多くは、「認識論サークル」と『分析手帖』の試みが、5 月革命の衝撃によって終焉を迎え、忘れ去られたと結論づけている。これらの先行研究は、『分析手帖』全体の内在的分析を行った上でその意義を示しているのではなく、5 月革命という外在的原因によって限界を露呈したものとして、否定的な評価を与えている。しかし、『分析手帖』の試みの重要性を十分に理解するためには、1200 ページにのぼる『分析手帖』のテクスト全体を当時の思想的文脈の中に置き直し、その展開を詳細に検討しなければならないだろう。

本計画は、先行研究の成果と残された課題を踏まえ、『分析手帖』の歩みを内在的に分析し、60 年代フランスにおける「概念の哲学」の発展をこの雑誌の活動を媒介として理解することを目指す。『分析手帖』が扱った対象は、マルクス主義、精神分析、構造主義人類学、文学、エピステモロジー（科学認識論）と多岐にわたる。しかし、そのどれもが「主体の哲学」が自明のものとした主体の特権性を疑問に付すものであった。その意味で『分析手帖』は、「概念の哲学」の諸潮流を統合し、刷新しようとする独創的な知的営みの場であった。この営みを構成する諸要素を画定し、それらの間の諸関係を分析することによって、その成果を明らかにすることは、60 年代フランス思想の発展全体を新たな視座で見直すことにもつながると考えられる。

２．研究の目的

『分析手帖』が 60 年代フランス思想において果たした役割を理解するために、以下の 2 つの段階を区別しつつ研究を遂行する。

(1)『分析手帖』の全体像の把握

(2)「概念の哲学」との関係の解明

以下に各段階における具体的な検討対象・目的を示す。

(1)『分析手帖』の全体像

『分析手帖』各号のテーマならびに掲載論文の内容と編集体制・方針の変遷の詳細な分析を行い、『分析手帖』という知的生産の場の特質を明らかにする。また、関係資料の調査によって、当時の知的・政治的状況と『分析手帖』の関連を解明する。特に、「概念の哲学」に属する哲学者・思想家たちと「認識論サークル」メンバーの知的交流を詳細に分析する。

(2)「概念の哲学」と『分析手帖』

『分析手帖』各号では、過去や同時代の哲学者・思想家の論考とともに、「認識論サークル」メンバーによる関連論考を掲載している。過去そして同時代の「概念の哲学」と向き合いつつ、彼らがどのような成果を上げたかを、心的なもの、政治的なもの、科学的認識の構造と歴史という、『分析手帖』の 3 つの中心的テーマに着目しつつ考察する。

３．研究の方法

課題１：予備的研究

「認識論サークル」結成から終刊に至るまでの経緯を、同時代の資料も用いつつ詳細に分析し、『分析手帖』の全体像を明らかにする。

1-1：『分析手帖』各号のテーマ、掲載論文、執筆者、編集体制等の変遷の分析

1-2：『分析手帖』を取り巻く知的状況の解明

課題 2：個別研究

心的なもの、政治的なもの、科学的認識という上記の 3 領域について、ラカン、アルチュセール、エピステモロジーという参照軸を設定し、『分析手帖』の諸論考の成果との関係を解明する。

2-1：「概念の哲学」としての精神分析—「認識論サークル」のラカン理解

2-2：「概念の哲学」における政治的なもの—アルチュセールと弟子たち

2-3：エピステモロジーの諸系譜（論理学、数理哲学、自然科学の哲学、言説分析）

課題 3：比較研究

課題 2 で考察した 3 つの領域それぞれが他の 2 領域と持つ関係を、『分析手帖』を出発点として分析し、「概念の哲学」に属する諸領域の共通点と差異を明らかにする。

3-1：精神分析と政治思想史—ラカンとアルチュセールのはざまの『分析手帖』
3-2：精神分析とエピステモロジー—心的なものの科学とその歴史
3-3：政治的なものとエピステモロジー—科学、主体、イデオロギー

課題 4：総合研究
課題 1、2、3 の成果を踏まえ、『分析手帖』の同時代的な意義ならびにそれ以降のフランス思想に与えた影響について検討する。哲学的テクストだけでなく、同時代の政治グループの機関誌や政治的パンフレット等の資料も分析の対象とする。特に、68 年以降の「政治の季節」においても有効性を保ち続けた『分析手帖』の成果について注意深く分析する。
4-1：『分析手帖』が成し遂げたもの—1960 年代後半の「概念の哲学」の統合と刷新
4-2：『分析手帖』の影響—70 年代以降の「概念の哲学」の発展における役割
4-3：「概念の哲学」の 68 年 5 月—「概念」は異議申し立てを行ったのか？

４．研究成果

上記に示した研究方法に従い、研究を遂行した。また、研究対象について理解が進むとともに、新たな課題が発見され、それにともなって研究計画は修正されている。

以下に課題別の研究成果を示すとともに、各々に関連する業績を示す。

課題 1: 予備的研究

①「概念の哲学」が 20 世紀フランス思想史において果たした重要な役割について、「主体の哲学」との比較を行いつつ考察した（図書①）

②『分析手帖』研究の現状を整理し、今後の課題を提示した（論文②）。また、同論文に『分析手帖』の全体像の把握のための研究の成果として、『分析手帖』全 10 号の詳細な目次ならびにエピステモロジーサークルのメンバー、『分析手帖』の編集委員会メンバー一覧を作成し、『分析手帖』における「概念の哲学」の再解釈と変容がいかにして行われたかを解明するための基礎を作成した。

課題 2：個別研究

③『分析手帖』におけるスピノザ哲学の位置を明らかにした（論文①、図書②、⑤）ことは、フランスの「概念の哲学」の潮流のルーツのひとつとしてのスピノザ哲学が、20 世紀中葉のエピステモロジーの流れの中でいかなる役割を果たしていたかを解明するものであり、20 世紀フランス思想史におけるスピノザの役割に新たな光を当てるものであった。

④エピステモロジーサークルの成立に大きな思想的影響を与えたジョルジュ・カンギレムの思想を、20 世紀フランス思想に多大な影響を与えたヘーゲル哲学のフランスにおける受容の観点から考察した（著書④）。これによって、カンギレム経由でのスピノザ、ヘーゲルのエピステモロジーサークルへの影響という思想的系譜の存在の可能性について考察した。

課題 3：比較研究

⑤エピステモロジーサークル以降に政治的なものとエピステモロジーの関係を探求した思想家としてフーコーを位置づけ、特に共同体に関する彼の考察を総体的に検討した（論文③、著書②、⑥）。

課題 4:総合研究

⑥エピステモロジーサークルが誕生するきっかけとなった共産主義青年同盟マルクス=レーニン主義派の機関誌『マルクス=レーニン主義手帖』について 2017 年 9 月に高等師範学校図書館（パリ）にて調査を行った。同誌の内容については、これまで断片的にのみ知られてきたものの、体系的な研究はほとんど存在していない。しかし、『分析手帖』の成立を考える上では不可欠の資料である。現在当該資料の分析を進めており、平成 30 年度中に学会発表 1 回ならびに論文 2 本で成果を発表する予定である。

このような成果によって、当初の目的の多くは達成されたものの、精神分析との関係、アルチュセールならびにマルクス主義との関係についてはさらなる研究が必要であるように思われる。これらの論点についても『マルクス＝レーニン主義手帖』と『分析手帖』との関連の分析を通じて、平成 30 年度中に新たな考察を公表すべく準備を進めている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
①<u>坂本　尚志</u>「『分析手帖』とスピノザ—構造と主体への問い」『フランス哲学・思想研究』第 21 号、3-16 頁、2016 年

②「共同体と他者—フーコーとともに考える」『ER　富士通総研経済研究所　経済・経営・技術読本』第 4 号、2017 年、26-29 頁

③<u>坂本　尚志</u>「『分析手帖』研究の課題」『京薬論集』23 号、2017 年、57-73 頁

〔学会発表〕（計 2 件）
①<u>坂本　尚志</u>「スピノザと『分析手帖』—「言説の理論」の計画」「フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ」第 6 回研究

会、大阪大学、2015 年 8 月
②坂本　尚志「『分析手帖』とスピノザ—構造と主体への問い」日仏哲学会 2015 年秋季研究大会シンポジウム「現代フランス哲学の知られざるスピノザ」、立教大学、2015 年 9 月

〔図書〕（計 6 件）
①坂本　尚志「「現代思想」の系譜」『教養としてのフランス近現代史』杉本淑彦、竹中幸史編、ミネルヴァ書房、2015 年、245-260 頁
②坂本　尚志「「他者とともにあること」の歴史性—フーコーと共同体の問い」『共にあることの哲学——フランス現代思想が問う〈共同体の危険と希望〉1 理論編』岩野卓司編、書肆心水、2016 年、209-245 頁
③坂本　尚志「構造と主体の問い—『分析手帖』という「出来事」」『主体の論理・概念の倫理—20 世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』上野修、米虫正巳、近藤和敬編、以文社、2017 年、169-191 頁
④坂本　尚志「カンギレムとヘーゲル—概念の哲学としての生命の哲学」『主体の論理・概念の倫理—20 世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』上野修、米虫正巳、近藤和敬編、以文社、2017 年、319-342 頁
⑤坂本　尚志「ジャック=アラン・ミレール、ジャン=クロード・ミルネール、アラン・バディウ」『主体の論理・概念の倫理—20 世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』上野修、米虫正巳、近藤和敬編、以文社、2017 年、192 頁
⑥坂本尚志「「合理性の共同体」の存続のために—哲学的思考と教育」『共にあることの哲学と現実－家族・社会・文学・政治』岩野卓司編、書肆心水、2017 年、113-143 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
坂本　尚志（SAKAMOTO TAKASHI）
京都薬科大学　基礎科学系　一般教育分野
准教授
　研究者番号：60635142